

第一次世界大戦後の合衆国黒人運動におけるカリブ移民の役割

——シ ril・ブリッグズにおける人種と階級——

竹本友子

I 問題の所在

合衆国を世界の指導的存在へと押し上げた第一次世界大戦は、黒人にも大きな影響を与えた。北部の産業における労働力不足はすでに始まっていた南部黒人の北部移住を加速させ、またカリブ海地域からの黒人移民も激増した。デモクラシーを擁護するために参戦するというウィルソン大統領の言葉に応じて多くの黒人が従軍したが、人種関係にもデモクラシーが拡大することへの期待とは裏腹に、人種差別は改善されるどころかリンチや人種暴動が頻発した。

しかしながらそのなかで従軍による自信と人種関係のさらなる悪化に対する新たな怒りを背景に、それまでの黒人運動に飽き足らず、より戦闘性を強めた「ニュー・ニグロ」(New Negro)の運動が起こってくる。この「ニュー・ニグロ」の運動については、いわゆる「ハーレム・ルネサンス」という形で文学・芸術上の運動としては早くから注目されてきたが、黒人運動史上かつてない大衆的支持を得たジャマイカ出身のブラック・ナショナリストであるマーカス・ガーヴィー(Marcus M. Garvey)のアフリカ帰還運動を除けば、政治的運動としては研究の対象とはならなかった。そのガーヴィーの運動でさえ、正当に評価されるようになったのは近年のことである。

「ニュー・ニグロ」の運動の中心的役割を担ったのは、ガーヴィーを含めたカリブ海地域出身の黒人移民であった。合衆国への移民の流入は20世紀の初頭にピークを迎えるが、黒人の移民も同様の傾向を示しており、1899年には年間411人にすぎなかった移民数がその後急激に増加し、1924年には12247人が入国している。その7割以上がカリブ海地域の出身者で、さらにその8割ほどが英語圏の出身者であったと推定され、彼らの多くがニューヨーク市のハーレムに集住していた⁽¹⁾。合衆国の黒人と比較した場合、100%近い識字率に示される教育程度の高さと、専門職、ホワイト・カラー、熟練職人の割合の高さがカリブ移民の際立った特徴であった⁽²⁾。

カリブ移民のこのような背景と政治意識の高さがあいまって、社会主義運動や労働運動等、この時期の急進的な運動において彼らが占める割合と役割は顕著なものであった⁽³⁾。だが、それにもかかわらず、カリブ移民は合衆国の他のエスニック集団と異なってエスニック・アイデンティティの確立が遅かったため、移民集団としての彼らについての本格的な研究自体が始まったばかり

りである⁽⁴⁾。加えてW・E・B・デュボイス (William E. B. Du Bois) がガーヴィーの運動を「西インド諸島人の」運動と呼んだことに端的に示されるように、合衆国生まれの黒人指導者たちが彼らにある種の偏見をもっていたこと⁽⁵⁾、そしておそらくそれが研究史にも影響を与えたことが、合衆国の黒人運動における彼らの役割の正当な評価を妨げたと思われる。また、唯一注目を集めたガーヴィーの運動が、その外面的な奇抜さやKKKとの提携に象徴される自己矛盾のために異端視されたことが、「ニュー・ニグロ」の運動が有していた重要性を覆い隠したという事情も指摘できるだろう。

本稿では以上のような研究状況と問題意識をふまえて、「ニュー・ニグロ」の一人であるシリアル・ブリッグズ (Cyril V. Briggs) を取り上げる。ブリッグズは1887年英領リーワード諸島のネーヴィスに生まれ、1905年に合衆国に移住した。そしてニューヨークの黒人週刊新聞『アムステルダム・ニュース』(*The Amsterdam News*) 紙の編集者を経て、1918年秋、月刊誌『クルセイダー』(*The Crusader*) を創刊した。翌1919年、人種暴動の激化を背景に、他のカリブ移民らとともに黒人自衛組織「アフリカン・ブラッド・ブラザーフッド」(*The African Blood Brotherhood*、以下ABB) を設立する。その後ブリッグズとABBはほぼ同時期に創設された合衆国共産党との結びつきをさらに強めていき、1923年にはABBは事実上同党に吸収される。ブリッグズは1942年にリチャード・ムーア (Richard B. Moore) らとともにブラック・ナショナリズムの傾向を理由に共産党から追放されるが、第二次大戦後復帰して活動を続け、1966年ロサンジェルスで世を去った⁽⁶⁾。

散在していた『クルセイダー』が1987年にリチャード・ヒル (Richard A. Hill) によって編纂されてから、ようやくブリッグズとABBは注目されるようになった。後述するようにABBと共産党の関係、とくにABBの独立性をめぐる見解の対立はあるものの、各研究者ともブリッグズの特徴については「ブラック・ナショナリズムと革命的社会主義の融合」という点で一致を見ている⁽⁷⁾。本稿ではこうした先行研究をふまえつつ、主として『クルセイダー』の記事を中心に、ブリッグズが一見矛盾するこの立場にどのようにして到達したのか、またそのことにどのような意味があるのかを探り、さらにそのことによって浮かびあがる合衆国の黒人運動の特徴について論じたい。

II ブリッグズにおけるブラック・ナショナリズムと黒人の「民族自決」

「ニュー・ニグロ」がその名称にもかかわらず、19世紀のブラック・ナショナリズムの伝統を受け継いでいたことは確かである。ブリッグズの『クルセイダー』もその例に漏れず、明白に「人種第一」(Race First) の立場をとっている。創刊号で明らかにされている「クルセイダーの目的」には、人間の生得的な権利の平等という「永遠の真理」の普及、黒人の歴史や文化についての誤った知識を一掃し、真実を伝えること、「アフリカ人のためのアフリカ」支援、南アメリカや西イン

ド諸島における黒人の「すぐれた戦略的位置」について合衆国黒人を啓蒙すること、黒人の権利のために断固として戦うことがあげられている (*The Crusader*, Vol. I, no.1, p.4. 以下、同誌からの引用は I-1, p.4のように略記)。またこの号の「人種の教理問答」と題する一文においては、人種の誇りや人種への忠誠心 (Race Patriotism) が奨励され、人種第一の立場が強調されている (I-1, p.11)。

当時のカリブ黒人のジャーナリズムが全般的に「人種差別や自衛、黒人の歴史と文化、コミュニティの重要な諸問題」を特徴としていた⁽⁸⁾ように、『クルセイダー』においても合衆国の黒人の多岐にわたる関心事が取り上げられているが、とりわけ初期には黒人の経営する企業への支援の訴えや成功した黒人企業家の紹介等、黒人の実業に関する記事と、黒人の過去及び現在の文化への関心が目立つ。前者に関しては、当初カリブ人の貿易商アンソニー・クローフォード (Anthony Crawford) が『クルセイダー』を財政的に支援していたことも関係しているが、『クルセイダー』以前の『アムステルダム・ニュース』時代からすでにブリッグズに見られる傾向でもある⁽⁹⁾。急速に産業が発達し、経済的成功が高く評価されたこの時代に、黒人にとって実業の世界で成功することはたんなる経済的メリットのみではなく、白人に劣らない黒人の能力を証明するものとして重要な意味をもっており、イデオロギーの相違にかかわらずほぼすべての黒人に支持されるものであった⁽¹⁰⁾。

後者に関していえば、当初ブリッグズが「ハミティック・リーグ・オブ・ザ・ワールド」(The Hamitic League of the World, 以下 HLW) というアフリカ中心主義の団体と提携しており、1919年と20年の丸2年間『クルセイダー』がこの団体の「広報誌」であったこと⁽¹¹⁾が背景にあるが、その関係が切れた後も、たとえば黒人の歴史やアフリカについての無知を戒める論説 (III-3, p.10; III-4, pp.12-13) や、過去の時代においては白人よりも黒人の方が先進的であったし、古代エジプト文明も黒人起源であるといったアフリカ中心主義の主張 (III-6, pp.8-9; IV-6, p.10) が見られる。このような強い人種意識はブリッグズにおいて一貫したものであり、黒人が「理論上のみでなく実際にも」合衆国市民として認められるまでは、「黒人第一」(Negro First) の姿勢を貫くことを宣言している (II-2, p.9)。

黒人の自治の要求も伝統的なブラック・ナショナリズムと共通するものであるが、この点に関しては時間の経過とともにブリッグズの主張の内容に変化が見られる。まず大戦中の1917年9月、ヨーロッパの諸地域におけるナショナリズムの高まりを背景に、ブリッグズは『アムステルダム・ニュース』紙上で合衆国の領土内に独立した黒人国家の建設を要求する。「われわれが数の上で圧倒されればされるほどわれわれは弱体化し、われわれが弱体化すればするほどわれわれが得られる敬意も正義も機会も減少することを考えれば、われわれを代表し、尊重し、前進させてくれるような政府をもった独立した政治的存在というものを考えてもよい頃ではないだろうか。何世代にもわたる報われることのない苦役と、自由人としての半世紀間のアメリカの繁栄に対する

貢献に裏打ちされて、人口の十分の一を占めるわれわれには、自治と幸福の追求のためにわれわれの分け前である合衆国の大陸の十分の一の領域を要求するに足る理由と正当性が存在する。」⁽¹²⁾

この構想は後述するコミンテルンによる合衆国深南部の黒人の自決権の承認を10年以上も先取りするものであったが、ブリッグズの提案では深南部ではなく、西部の人口まばらな地域が想定されていた⁽¹³⁾。

1918年1月、ウィルソン大統領のいわゆる14カ条が発表されると、その中の民族自決の原則に刺激されて、ブリッグズの黒人のための自決権の主張は合衆国の枠を超えてアフリカへと拡大する。すなわち彼は「アフリカ人のためのアフリカ」と題する『グローブ』(*The Globe*)紙への寄稿文において、アフリカの植民地に「国際的な、あるいは合衆国の一時的…な指導下に、住民の自由な国家を設立する」ことを提案している⁽¹⁴⁾。そしてすでに見たとおり、この年の秋に創刊される『クルセイダー』誌上でもウィルソン大統領への期待とともに「アフリカ人のためのアフリカ」が頻繁に主張されることになる。

しかしここで確認したいのは、このアフリカ人の民族自決についても19世紀半ばのマーティン・デレイニ (Martin R. Delany) の移民運動の場合と類似したブラック・ナショナリズムによる正当化が行われていることである。すなわち1919年11月の「黒人種に対するアメリカ黒人の責務」と題する論説において、ブリッグズは自治能力の有無が人種の優劣を示す根拠とされていることを指摘し、平等達成のためにも「世界とわれわれ自身に対して、われわれの自治への適応力を十分かつ強力に示すこと」が重要であると述べている (II-3, pp.8-9)。また約1年後の1920年10月にも「アフリカ人のためのアフリカ」という論説において、アフリカに強力な安定した国家をつくるのが人種全体の利益になることを主張し、「『アフリカ人のためのアフリカ』は黒人のあらゆる病に対する万能薬」であるとしている (III-2, pp.8-9)。これは「アメリカ黒人と西インド諸島の黒人は血統において一つであり、…どちらもアフリカの子孫である」(I-1, 30) と述べているように、ディアスポラの黒人がアフリカに起源をもつものとして一体であるという認識に基づくものであった⁽¹⁵⁾。

ブリッグズの黒人のための民族自決論はその後さらに視野を広げ、黒人のみにとどまらず、世界中の被抑圧民族との連帯が志向されることになる。1921年8月には「われわれがインド人やアイルランド共和国派、ソヴィエト・ロシア、トルコの民族主義者、そしてとくに英国に対して、また資本主義—帝国主義世界全般に対して現在脅威を与えているかまたは将来与えるその他のすべての勢力と共闘するべきである」と述べている (IV-6, p.8)。この反帝国主義的視点はブリッグズの共産主義運動への接近と相関するものであるが、彼がイギリスの植民地出身であったことも背景として考えられる。それは「黒人が専制と抑圧に対するアイルランド人の戦いに共感したり、またその逆に彼らがわれわれに共感するのは容易に起こりうることである。なぜなら

両者とも同じ苦境にあり、両者ともに同じアングロサクソン人種の犠牲だからである」(III-6, p.5) と、アイルランドの反英闘争への言及が頻繁に見られることから理解される⁽¹⁶⁾。

以上のようにブリッグズの黒人自決論は、合衆国内における独立国家の構想からアフリカの民族自決を経て、全世界の被抑圧民族との連帯・共闘という国際的な広がりをもつものへと発展していった。しかしながら大戦後、誕生しつつあった国際連盟とウィルソン大統領自身に幻滅し、前者を「泥棒と暴君」のための機関、後者を「信用できない人物」と呼ぶ (I-6, p.6; I-8, p.8) ようになった後は、「アフリカ人のためのアフリカ」を実現する具体的な方法については明確にされていない⁽¹⁷⁾。また、1920年の半ばくらいまでは、合衆国内における黒人の独立国家構想や、白人との平和裏の共存は不可能との理由による合衆国黒人の南アメリカ等への移民の主張も『クルセイダー』の誌面に散見される (II-11, p.5; II-10, pp.12-13) という曖昧さも残る。ブリッグズの黒人自決論は黒人解放の具体的なプログラムというよりは、さまざまな方面にわたる黒人の自立性の主張の一環としてとらえるべきであろう。

III ABB 創設と革命的社会主義の影響

1919年の夏、合衆国では20件を超す大規模な人種暴動が各地で起こり、「レッド・サマー」と呼ばれた。この時期の人種暴動は黒人の側の自衛のための抵抗を特徴としているが、ブリッグズは9月の『クルセイダー』誌上でこのような黒人の反撃を誇ることのできる正当な理由があると擁護している (II-1, p.3)。さらに翌月には「ニュー・ニグロ」のこの戦闘性を、半世紀を経ても「リンチ、参政権の剥奪、人種差別、人種隔離、その他多くの病弊」を解決できない「オールド・ニグロ」、すなわち既存の黒人指導者の無力と対比させる形で賞賛している (II-2, pp.9-10)⁽¹⁸⁾。

この年の秋にブリッグズがABBを創設したことは、明らかにこのような黒人をめぐる状況に刺激されたものである。ABBの20人に満たない創設メンバーの大半はハーレムに住むカリブ地域出身の黒人であり、その後しだいに合衆国内の他の地域やカリブ地域に支部が設立されるようになったが、会員数は最盛時でも3000人を超えることがなかった⁽¹⁹⁾。ABBの性格や組織の実体には曖昧で不明な点が多い。『クルセイダー』誌上でABBの設立が発表されたのは19年の10月号だが、その記事は見逃してしまいそうなるほど小さく目立たないものであり、ABBの性格を示しているのは「アフリカ人の解放と贖いのための」という形容詞のみである (II-2, p.27)。これは互いの血液を交換することで同胞であることを確認するというアフリカの儀式 (V-3, p.6) に由来するその名称だけでなく、入会の儀式や等級制の存在などが示すように、ABBが「友愛組合あるいは結社に似た」「秘密組織」(II-10, p.7) として出発したことによる。

ABBの綱領は 1. 人種の解放 2. 完全な人種平等 3. 人種の自尊心の育成 4. クー・クラックス・クランに対する組織的で非妥協的な抵抗 5. 黒人の統一戦線 6. 産業の発展 7. 黒人労働者の賃金の引き上げ、労働時間の短縮、生活条件の向上 8. 教育 9. 他の有色人種や

階級意識をもった白人労働者との協力、とされているが、これは設立当初のものではなく⁽²⁰⁾、『クルセイダー』誌上で公表されたわけでもない。設立から8ヶ月後の1920年6月になってようやくABBの詳しい組織紹介記事が『クルセイダー』誌上に登場するが、その中のABB会員および黒人一般に対する「提言」では、1.労働運動への参加 2.黒人企業の後援 3.ガーヴィーのUNIA運動の助長 4.黒人に権利を認めない国家に対して忠誠心をもつことの否定 5.他の被抑圧民族との協力 6.近代戦の研究 7.ビジネスや近代的な農業技術等の習得 8.人種第一の立場 9.人種第一の思想の普及 10.黒人企業への投資 11.皮膚の色の濃淡や出身地による黒人内部のカースト否定 12.卑屈さや無知、不道德、人種的誹謗に反対する世論の形成 13.人種教育の奨励 14.人種の自尊心の育成 14.黒人史・黒人問題の研究サークル設立 15.依存の否定、自主的な戦いの奨励、の諸点が主張されている(II-10, p.22)。すでにこの時点で階級的観点が見て取れるが、伝統的なブラック・ナショナリズムの特徴は明らかで、「人種第一」の立場に立っていることが確認できる。

1921年の6月、ABBを有名にした出来事が起こった。オクラホマ州タルサの人種暴動において、当地に支部をもっていたABBの活動家が黒人の武力抵抗を「扇動」したという報道がなされたのである⁽²¹⁾。当初ブリッグズはこれを否定するが、直後の『クルセイダー』の誌面は巻頭のABBタルサ支部長の報告に始まり、各新聞報道の転載等、タルサ暴動関係の記事で埋められ、この報道をABBの宣伝に最大限利用した形になった。論説では扇動の事実を「嘘」と否定しつつも、「攻撃された黒人がきわめて効果的に身を守り、過去にはいわゆる人種暴動につきものであった、指導者をもたない黒人たちの容易な虐殺を避けることを可能にした組織化と戦術」がABBのせいであるかどうかについては、「われわれは否定も肯定もしない」と意図的に曖昧な態度をとっている(IV-5, pp.10-11)。『クルセイダー』誌上では以前からKKKに代表される白人の暴力に対して、「殺人者がわれわれの喉に掴みかかったら、われわれには武器をえらんでいる余裕ではなく、毒薬であれ銃であれ何であれ、手の届くところにあるものなら何でも使って自分を守らなければならない」(III-5, p.5)と、武器を用いての自衛を主張していたが、このタルサ暴動は黒人に対する白人の暴力が横行する時代に戦闘的な黒人自衛組織としてのABBの名声を一時的にせよ高めることとなった。入会希望者は増加し、ABBは入会手続きを簡略化することでこれに応えた⁽²²⁾。この時点でABBは「秘密組織」から大きく踏み出したといえる。

同じ頃、『クルセイダー』の論調にも明らかな変化が見られるようになる。先に見たように、ABB設立当時、ブリッグズはすでに革命的社会主義の影響下にあった。ABBの創設を告知した『クルセイダー』の1919年10月号においては、合衆国では白人同様黒人の間でも反発の強かった「ボルシェヴィスト」という言葉を取り上げ、「権利のために戦うことがボルシェヴィストになることなら、われわれはボルシェヴィスト」である(II-2, p.9)と述べ、パーマーの赤狩りの直後である翌年2月には、ボルシェヴィズムの「脅威」は黒人にとってのものではなく、帝国主義者に

とってのものである、と述べている (II-6, pp.5-6)。黒人に向かって革命理論自体を説くのではなく、まずは運動に対する先入観や偏見を取り除こうとする姿勢が見て取れる。

当初提携していたアフリカ中心主義団体の HLW との関係が切れた1921年以降、ブリッグズは革命的社会主義への傾斜を強め、『クルセイダー』が正式に ABB の機関誌となった (IV-4, p.1) 同年の半ば頃 (これはタルサ暴動が起こった時期と重なる) には、誌面に左翼用語が頻出することになる。以後、海外の共産党についてのニュースやソヴィエト・ロシアへの賛辞が散見されるようになり、白人労働者と黒人労働者の利害の一致、両者の連帯の必要が強く叫ばれるようになる。ブリッグズをはじめとする ABB の幹部が合衆国共産党 (労働者党) に入党した正確な時期は特定できないが、この1921年中のことであると推測されている⁽²³⁾。

IV ブラック・ナショナリズムと革命的社会主義

20世紀初期の黒人運動家の中には、合衆国生まれの A・フィリップ・ランドルフ (A. Philip Randolph) やチャンドラー・オーウェン (Chandler Owen)、カリブ移民のヒューバート・ハリソン (Hubert H. Harrison) のように社会党に加わる者もいたが、黒人の多くは社会党を支持しなかった。その大きな理由は黒人問題に関する同党の姿勢にある。すなわち社会党は黒人を労働者階級の一部を構成するものとしてのみ位置づけ、社会主義社会の実現によって人種問題は自動的に解決するとして、合衆国の人種問題の特殊性を認めなかった。「われわれは黒人に提供する特別なものはないし、すべての人種に別々に訴えることはできない。社会党は肌の色にかかわらず、労働者階級全体—全世界の全労働者—の党である」というユージン・デブズ (Eugene V. Debs) の言葉はそれを表している⁽²⁴⁾。『クルセイダー』誌上では読者に再三社会党への投票を勧めながら自身は社会党に入党しなかった理由を、ブリッグズは同党が「合衆国における黒人の抑圧の特殊な性格を認識」しようとしなかったからだと説明している⁽²⁵⁾。

1919年に社会党が分裂して、その中から共産党 (Communist Party) と共産主義労働党 (Communist Labor Party) の二つの組織が誕生する。両者は1921年にコミンテルンの指示で統一されるのであるが、設立当初の共産党の黒人問題に関する姿勢は社会党のそれを引き継いだものであり、何ら特別な黒人政策をもたず、ブラック・ナショナリズムも否定されていた。

しかしながら、ブリッグズが共産党に入党した頃から共産党の黒人政策は大きく転換することになる。その契機は1920年、第二回コミンテルン大会でレーニンが「黒人問題」に言及し、黒人にも民族自決の原則を適用することを示唆したことに始まる⁽²⁶⁾。そして彼は合衆国の共産党に対して、黒人の戦略的重要性の認識と彼らへの働きかけを促した。これを受けた同党は ABB に働きかけ、ブリッグズらの入党が実現することになる。以後、ABB は事実上共産党の下部組織として機能することになる。1923年の夏にはまだ ABB の独立性を主張していたブリッグズであるが、同年末には吸収合併に同意、ABB は独立した組織としての活動に終止符を打った⁽²⁷⁾。

しかしこれはブリッグズのブラック・ナショナリズムに革命的社会主義が取って代わったことを意味してはいない。彼の新しい立場は1921年4月の『クルセイダー』誌上の「黒人の救済」と題する論説に最も明確に表れている。このなかでブリッグズは、少なくとも資本主義システムの下では黒人と白人の共存は困難とし、これを社会主義協同国家 (Socialist Co-operative Commonwealth) に取りかえれば平和裏の共存が可能かもしれないとしつつも、「しかしながら黒人は過去にその他の人類によってきわめて残忍に扱われてきたので、この問題を…黒人としての観点から見るとは無理もないとし、また彼らが「彼らの権利と抑圧からの解放が、彼ら自身の力に基づくこと」をより好むかもしれないと、黒人の自決権に理解を示している。その上でブリッグズが「最も確実かつ迅速な方法」として主張するのが「アフリカまたは他の場所における（われわれ自身の人種的特性に基づいた）黒人の強力で安定した独立国家の設立によるすべての黒人の救済と、普遍的な社会主義協同国家の設立によるすべての黒人（とその他の被抑圧民族）の救済」であった。(IV-2, pp.8-9) この黒人の歴史に由来する「人種第一」の立場への理解に基づいたブラック・ナショナリズムと革命的社会主義の共存・両立がブリッグズの最大の特徴といえる。

後になってブリッグズは自身の共産主義への関心が「ロシアのボルシェヴィキの民族政策と10月革命によって誕生したソヴィエト国家の反帝国主義傾向によって生じた」ものであり、当時は「社会革命」よりも「民族解放革命」により関心をもっていたと述べ、晩年にも「われわれの黒人同志が入党したのは、彼らが社会主義者であったからではなく、党が黒人の戦場で戦っていたからである」と説明している⁽²⁸⁾。『クルセイダー』の誌面でも再三ソヴィエト・ロシアがイギリスなどの「帝国主義」列強と敵対していることをあげ、「われわれの敵の敵」は味方であるという論法でソヴィエトへの支持を呼びかけている (VI-1, p.9)。ブリッグズの共産党への接近は、社会主義理論への帰依というよりは、同党の背後にあり、実質的に同党の方針を決定していたコミンテルンやソヴィエト・ロシアの政策・方針が黒人解放に資するものであるというプラクティカルな判断に基づいたものであり、それゆえ革命的社会主義を受容してもブラック・ナショナリズムを放棄する必要は認められなかったのである。おそらくは正式な入党を済ませ、「プロレタリアの国際的な連帯」といった言葉が『クルセイダー』の誌面を飾るようになった後も、一方で読者に対して日常生活における不満や地域の問題について知らせるよう促している (V-3, p.16) し、ABBが組織としての独立性を失う直前の時期にも会員の保険機構設立の計画や全国の都市に協同組合の店舗を設置する計画が検討されている⁽²⁹⁾。ブラック・ナショナリズムに基づくABBの相互扶助組織としての側面は、最後まで失われることはなかった。

1922年の第4回コミンテルン大会では合衆国共産党の黒人代表によってアメリカの黒人問題が提起され、黒人問題に関する委員会が設置される。そしてその結果として、黒人の運動への支援等を含む「黒人問題に関するテーゼ」が採択されることになる。その後、黒人問題を国際的な共産主義運動の文脈に位置づけようとする傾向はさらに進み、激論の末、1928年の第6回大会では

合衆国南部ブラック・ベルトの黒人を自決権をもつ被抑圧民族、いわゆる「国家の中の国家」(nation within a nation)として位置づけるテーゼが採択された。そしてさらなる議論を経て1930年にはこの立場が最終的に確立されることになる⁽³⁰⁾。以上の過程を考えると、しばしば主張されるようにブリッグズらが共産党に取りこまれたというよりは、彼らのブラック・ナショナリスト的立場が共産党の中に反映されていったというべきであろう⁽³¹⁾。

共産党内部でもブリッグズは一貫して「人種」を問題にする姿勢を貫いていく。1920年代末にはハイチ革命の指導者トゥサン・ルーベルチュール(Toussaint L'Ouverture)や19世紀の合衆国の黒人指導者フレデリック・ダグラス(Frederick Douglass)等黒人の英雄を歴史の中で再評価する「黒人週間」(Negro Weeks)を始め⁽³²⁾、また「わが党の黒人活動」と題する論文では党の姿勢を総括し、依然として残存する白人党員の「ショーヴィニズム」を批判している⁽³³⁾。

しかし合衆国の黒人が南部のみならず北部においても抑圧されているにもかかわらず、南部の黒人の自決権のみを承認していることや、そもそも黒人を「民族」として位置づけることに含まれる矛盾や問題点のために、共産党の黒人問題に関する新たな路線は結局長続きはせず、1930年代半ば以降、黒人の民族自決に否定的な流れが強まっていった。そして1942年、ブリッグズは同じカリブ移民のリチャード・B・ムーア(Richard B. Moore)らとともに、「黒人民族主義的思考様式」(Negro nationalist way of thinking)を理由に一時共産党を追放されることになる⁽³⁴⁾。

V カリブ移民と合衆国黒人運動

第一次大戦によるナショナリズムの高まりとソヴィエト・ロシアの成立という新たな国際的背景の下で、合衆国の黒人はリンチや人種暴動に象徴されるさらなる人種的抑圧を受けていた。そのなかで黒人の境遇改善に取り組んだブリッグズは、黒人問題を構成する人種と階級という二つの要素の二者択一を避け、ブラック・ナショナリズムに革命的社会主義を融合させるという独自の立場に立った。これには彼を含めたカリブ移民の母国と移住先の合衆国での体験が反映している。

彼らの出身地は合衆国と異なり、黒人が人口の圧倒的多数を占めていたが、イギリスなどヨーロッパ列強の植民地であり、その植民地支配の体験が彼らに帝国主義批判の鋭い感覚をもたせることとなった。そしてこのことは、ブリッグズがアイルランドやエジプト等イギリスの支配下にある諸地域の民族運動に強い連帯感を表明していたように、彼らが黒人の境遇を国際的な文脈でとらえることを可能にした⁽³⁵⁾。

ブリッグズらの故郷では、社会における黒人の地位も合衆国とは大きく異なっていた。そこでは合衆国同様、基本的には皮膚の色による境界線(カラー・ライン)が存在したが、人種と階級が複雑に絡み合う形で地位が規定されており、黒人には教育や職業によって階層を上昇させる可能性が存在した。このような少数の黒人の存在が「人種意識の増大を抑制」したため、彼らは自

分たちを「何よりもまず黒人とみなそうとはしな」かった⁽³⁶⁾。以上のようなカリブ地域における植民地支配と複雑な社会構造がカリブ黒人に国際的な視野と階級意識をもたらし、それが社会主義思想の受容のための土壌となった。

しかしながら、合衆国に移住したカリブ黒人が見出したものはまったく異なる環境だった。合衆国では白人と黒人の厳格な二分法が貫かれ、人種がすべてを決定した。彼らは出身地の相違や教育、専門知識の有無にかかわらず、一括りに「黒人」として扱われ、厳しい差別と搾取を体験することになった。ABBの創設メンバーの一人であるジャマイカ出身のW・A・ドミンゴ (Wilfred A. Domingo) はこのことについて次のように語っている。

人種的偏見の問題に直面して、外国生まれの黒人、とりわけ西インド諸島出身者は相当な適応を余儀なくされた。故郷では人種の多数派を形成しており、明白に人種的と感じられる差別に慣れていなかった彼らは、アメリカで見出した「皮膚の色の境界線」に反抗した。というのも、西インド諸島では皮膚の色の境界線と階層の境界線が重なりがちであるが、それにもかかわらず人口の割合、歴史的背景、そして解放の前と後とを問わない反乱の伝統のために、西インド諸島の有色人の社会的、職業的、その他の活動が人種によって決定されないということは確かなことである。皮膚の色は一定の役割を果してはいるが、それは向上の主要な決定要因ではない。それゆえ法律的なものであれ慣習的なものであれ、「皮膚の色の境界線」に出会い、それが個人の進歩を妨げていることに気づいた時、深い憤りが生じるのである。西インド諸島出身者がリンチや差別やアメリカの黒人が苦しんでいるその他の無力に対する戦いに全力で打ちこんでいるのは、そのためである⁽³⁷⁾。

ブリッグズらは、このような状況においてアメリカの黒人が何よりもまず強い人種意識をもつのは当然のことであり、この人種意識を基盤として運動を構築することは現実的なことでもあると考えた。同じくABBのメンバーであり、1928年のコミンテルンの黒人に関するテーゼの採択に影響を及ぼしたとされる⁽³⁸⁾ハリー・ハイウッド (Harry Haywood) は、ガーヴィーの運動に反映されている黒人のナショナリズムについて、外国から移植されたものではなく「合衆国における黒人の極度の搾取と抑圧という土壌から生じた自生的な産物」であり、「正当な傾向」であると擁護し、ガーヴィー運動は消滅してもブラック・ナショナリズムは消えないと断言している⁽³⁹⁾。

ブリッグズ自身もガーヴィー運動の「人種第一」の姿勢を評価していた。1921年の夏以降は共産党の意向を受けてガーヴィー支持者の取りこみを図ろうとし、ガーヴィーと敵対的な関係になったブリッグズであるが⁽⁴⁰⁾、初期の『クルセイダー』誌上ではしばしばUNIAを好意的に紹介し、読者にUNIAへの加入を促している。UNIAのブラック・ナショナリズムに基づく黒人大衆の大規模な動員力はブリッグズの目には魅力的に映ったであろう。ガーヴィーが国外追放になっ

て数年後の1931年、ブリッグズは「ガーヴィー運動の衰退」という論文でガーヴィー運動の総括を行っているが、初期のガーヴィーについてはその戦闘性などに一定の評価を与え、「疑いなく黒人大衆の民族的願望を具体化させるのに役立つ」としている⁽⁴¹⁾。

カリブ黒人の故郷と合衆国での体験は、彼らに人種と階級を相互排他的なものとは考えない態度と、この二つの間を自由に行き来する柔軟性を与えた。なかでもブリッグズの場合は、ブラック・ナショナリズムの伝統に立脚しながら同時に革命的社会主義の立場を共存させるという独特の立場を取らせた。合衆国のナショナリズムあるいは英国のナショナリズムから締め出された黒人にとって、ブラック・ナショナリズムと革命的社会主義のインターナショナリズムは決して相容れないものではなかった⁽⁴²⁾。

この点についてさらに言えば、たとえば19世紀の代表的なブラック・ナショナリストであるデレイニもアフリカへの移民運動を提唱する際、合衆国黒人の境遇を世界の他の被抑圧民族との関連の中に位置づけ、またアフリカの黒人との一体性を強調した点で、ある種のインターナショナルな視点をもっていたことは確かである。しかしながらデレイニがアフリカに対するアメリカ白人の眼差しを共有し、アフリカ黒人の「文明化」を主張したことで、彼のブラック・ナショナリズムの根底にあった白いアメリカへの同化願望という矛盾を露呈することとなった⁽⁴³⁾。

これに対してカリブ移民であるブリッグズの場合は合衆国の黒人にも強い拘束力をもつアメリカン・ナショナリズムの呪縛を受けず、これを相対化することができた。第一次大戦後の排外的なナショナリズムの高まりのなかで、ブリッグズは合衆国の黒人に対して、厳しい差別を受けながらも合衆国という国家やその政府に忠誠を誓うことの愚かさを主張している (III-2, p.10)。このことは合衆国の黒人が白人と共有する、社会主義のような急進的な思想を外国産の非アメリカ的なものとみなす態度からブリッグズが自由であったことにも通ずる。

しかしながら、結局ブリッグズの思想と運動は合衆国の多くの黒人にアピールするものではなかった。彼らが支持したのは、労働運動の豊富な体験と社会主義思想の知識をもちつつも UNIA の運動からそれを排除し、アメリカニズムと矛盾しない伝統的なブラック・ナショナリズムを前面に押し出したガーヴィーであった⁽⁴⁴⁾。ABB が一時的に支持者を増やしたのも、その革命的社会主義の受容によるのではなく、タルサ暴動で生命の危機に直面した地域の黒人たちに対して ABB が示したとされる、その戦闘性のためであった。「ニュー・ニグロ」の代表的な人物であるアラン・ロック (Allain Locke) は、合衆国の黒人を「人種的なことがらに関してはラディカルであるが、その他に関しては保守的」と評している⁽⁴⁵⁾。UNIA によって黒人大衆の潜在的な力を認識させられた合衆国の黒人運動指導者たちは、以後黒人大衆に働きかけるようになり、彼らを基盤にしつつ、しかしアメリカン・ナショナリズムの枠内で運動を進めていくことになる。

注

- (1) Winston James, *Holding Aloft the Banner of Ethiopia: Caribbean Radicalism in Early Twentieth-Century America* (New York: Verso, 1998), pp.12, 356; Irma Watkins-Owens, *Blood Relations: Caribbean Immigrants and the Harlem Community, 1900-1930* (Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1996), p.4.
- (2) James, *op.cit.*, pp.78, 81.
- (3) *Ibid.*, p.84.
- (4) Michelle A. Stephens, "Black Transnationalism and the Politics of National Identity: West Indian Intellectuals in Harlem in the Age of War and Revolution," *American Quarterly*, Vol.50, No.3 (September 1998), p.596.
- (5) Watkins-Owens, *op.cit.*, pp.115-125.
- (6)ブリッグズの経歴については、Robert A. Hill, "Racial and Radical: Cyril V. Briggs, *The CRUSADER* Magazine, and the African Blood Brotherhood, 1918-1922," Introduction, Robert A. Hill, ed., *The Crusader: Facsimile of the Periodical*, 3 vols. (New York: Garland Publishing, Inc., 1987) を参照。
- (7) Mark Solomon, *The Cry Was Unity. Communists and African Americans, 1917-1936* (Jackson: University Press of Mississippi, 1998), p.8; Hill, *op.cit.*, pp.xxxii-xxxiii.
- (8) Watkins-Owens, *op.cit.*, p.158.
- (9) *Ibid.*, p.160.
- (10) *Ibid.*, p.126.
- (11) Hill, *op.cit.*, p.xix.
- (12) *Amsterdam News*, September 5, 9, 1917, in Theodore Draper, *American Communism and Soviet Russia. The Formative Period* (New York: The Viking Press, 1960), p.323.
- (13) *Ibid.*
- (14) Hill, *op.cit.*, pp.xiii-xiv. ヒルはこの少し前になされたデュボイスによる同様の提案との類似を指摘している。
- (15) デレイニについては竹本友子「マーティン・R・デレイニのアフリカ移民運動—アンティ・ベラム期ブラック・ナショナリズムの研究—」『西洋史学』第156号(1990年)、pp.18-35。
- (16)ブリッグズを含めた「ニュー・ニグロ」へのアイルランド闘争の影響については、Matthew Pratt Guterl, *The Color of Race in America, 1900-1940* (Cambridge: Harvard University Press, 2001), p.91; Hill, *op.cit.*, p.xii.
- (17) Rod Bush, *We Are Not What We Seem. Black Nationalism and Class Struggle in the American Century* (New York: New York University Press, 1999), p.107.
- (18) 実際にはブリッグズのいう「オールド・ニグロ」もこの時期には戦闘性の高まりを見せる。たとえばデュボイスが19年5月の『クライシス』誌上に載せた「兵士の帰還」は、当局に警戒心を抱かせるものであった。Philip S. Foner, *American Socialism and Black Americans. From the Age of Jackson to World War II* (Westport: Greenwood Press, 1977), pp.294-295.
- (19) Draper, *op.cit.*, p.325.
- (20) *Summary of the Program and Aims of the African Blood Brotherhood, formulated by 1920 Convention*, in Hill, *op.cit.*, pp.xxviii, lvii; Draper, *op.cit.*, pp.545-546, fn.30.
- (21) Hill, *op.cit.*, pp.xxxiii-xxxiv.
- (22) Solomon, *op.cit.*, p.15.
- (23) 入党の時期については、大半の研究者がほぼ1921年で一致している。Draper, *op.cit.*, pp.325-326; Solomon, *op.cit.*, p.16. ヒルも入党の経緯の詳細については曖昧だとしているが、彼は ABB の創設時におけるブリッグズと共産党との関わりを強調している。Hill, *op.cit.*, pp. xxvi- xxvii.
- (24) Draper, *op.cit.*, p.316.
- (25) Briggs to Wayne Cooper, June 29, 1965, in Hill, *op.cit.*, p.xxvi.
- (26) 共産党の黒人問題をめぐる変遷については、Draper, *op.cit.*, pp.335-353; Cedric J. Robinson, *Black Marxism*.

The Making of the Black Radical Tradition (1983; Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2000), pp.219-227.

- (27) James, *op.cit.*, p.177.
- (28) Briggs to Theodore Draper, March 17, 1958, in James, *op.cit.*, p.166; "Discussion of Enlarged Negro Commission, L.A. 1960," in Hill, *op.cit.*, p.xxvi.
- (29) James, *op.cit.*, pp.172-173.
- (30) (26) に同じ。
- (31) ソロモンは ABB による革命的社会主義の採用が、創設期の合衆国共産党の「人種的見解」に多大な影響を及ぼしたとしている。Solomon, *op.cit.*, p.17.
- (32) *Ibid.*, p.184.
- (33) Briggs, "Our Negro Work," *The Communist* (1929.9), pp.494-501.
- (34) Hill, *op.cit.*, p.xlviii.
- (35) スティーヴンズは、彼女が「トランス・ナショナリズム」と呼ぶものの形成において、この点の重要性を指摘している。Stephens, *op.cit.*, pp.603-604.
- (36) Watkins-Owens, *op.cit.*, p.13; Violet M. Johnson, "Black Immigrants in the United States," Paul Spickard & W. Jeffrey Burroughs, eds., *We Are a People. Narrative and Multiplicity in Constructing Ethnic Identity* (Philadelphia: Temple University Press, 2000), pp.57- 61.
- (37) W. A. Domingo, "Gift of the Black Tropics," Allain Locke, ed., *The New Negro: An Interpretation* (1925; New York: Arno Press and the New York Times, 1968), p.347.
- (38) Draper, *op.cit.*, p.345.
- (39) Harry Haywood, *Black Bolshevik*, in Robinson, *op.cit.*, pp.223-224.
- (40) 「クルセイダー」の1921年10月号 (V-2) の誌面は、この取り込みの顛末を含めてほとんどガーヴィー攻撃一色となっている。Robinson, *op.cit.*, pp.217-218; Hill, *op.cit.*, pp.xli-xliii.
- (41) Briggs, "The Decline of the Garvey Movement," *The Communist* (1931.6), pp.548, 551.
- (42) Stephens, *op.cit.*, p.605.
- (43) この点については、竹本友子「マーティン・デレイニと1850年代の黒人移民運動」『早稲田大学文学研究科紀要 別冊』9, pp.393-402.
- (44) ガーヴィーの運動のとりわけ初期にインターナショナルな反帝国主義の色彩があったことは疑いのないことであり、それゆえ当局に危険視され、その徹底的な監視を受けたのであるが、ガーヴィーが時とともに保守化していったことも確かなことである。ブッシュはガーヴィーの思想を「(その経済的、政治的、社会的なヴィジョンにおける) 伝統的なアメリカの世界観と、黒人は白人と対等に張り合うことができるというラディカルな考えの混合物」と呼んでいる。Bush, *op.cit.*, p.101.
- (45) Alain Locke, "The New Negro," Alain Locke, ed., *op.cit.*, p.11.

【付記】 本稿は2001年度および2002年度早稲田大学特定課題研究 (2001A-037, 2002A-024) の研究成果の一部である。